

『宝物集』と延慶本平家物語

——身延山久遠寺本系祖本依拠について——

武 久 堅

は じ め に

延慶本平家物語はその成立に際し『宝物集』に負うところが多い。幸い、『宝物集』諸伝本の厳正な翻刻並びに研究もかなり公刊されたので、両書の関係を新たな見地から再検討しておきたい。先ずは研究史を通観し、問題の所在を見定めよう。

広く平家物語と宝物集との記事内容の勘合は『参考源平盛衰記』に始まるが、その狙いが、『盛衰記』記載事項の史的考証にあったので、取り分け宝物集の関連事項については、文献上の同類記事の指摘に留まっている。

後藤丹治は、『平家』の出典考証並びに灌頂卷成立論⁽¹⁾で、一方に両書の類似もしくは一致記事を多数列挙しつつ、尚、類話の可能性をも懸念し、他方、灌頂卷については、法皇と女院の六道問答の構成に宝物集の女房と僧侶の問答の反映を認め、かつ結論的には、延慶本及び『盛衰記』の「女院六道廻御物語」と宝物集との密接な関連を認めた。

七卷本宝物集(第一種)⁽³⁾を主なるテキストに据える考察であった。これを受ける佐々木八郎氏は、その灌頂巻成立説論で、「小原入御」の記事としては、延慶本や『盛衰記』に伝え遺された倂を、現存する諸本の中では最古のものと
いう見地に立って、それらの法皇・女院の六道問答についての後藤説を認めつつ、遡って、『平家』の原作の問題としては、原作に近い宝物集の影響を受けていないものと推定された。つまり、かかる『平家』の原作に対して、現存の「六道」は、『平家』の後の改作増補者が宝物集にヒントを得て企図したとするのが氏の見解である。

これらに対して富倉徳次郎氏は、後藤説の妥当性に疑問を提し、一巻本宝物集に限って、読みものの系の「小原御幸」より古いという立場に立ち、その影響の可能性も考えられなくはないとし、三巻本宝物集は逆に平家物語に依拠するという推定を下された。よって氏の「六道」の『全注釈』は、時代の傾向としての六道思想及び六道絵を踏まえて、主として『六道講式』並びに『往生要集』に依拠して解説されることになる。宝物集に対する平家物語の先行説には、他に麻原美子氏の説⁽⁴⁾が加わる。但し氏の関心は、宝物集の作者説についての通説批判に焦点があり、また、その成立過程についての試論は、後に紹介する小泉弘氏の宝物集の伝本調査で、かなり批判的に止揚されているかと判断されるので、改めて取り上げることはいない。

近年、渥美かをる、小泉弘の二氏が、四部合戦状本の灌頂巻「六道」に的を絞って、その依拠資料に宝物集を指摘し、その前提として不可避な課題となる宝物集の諸伝本の性格調査や系統論を周到に用意された。渥美氏は、四部合戦状本の灌頂巻は、「おそらく灌頂巻の嚆矢と思われるのだが」という観点と、「四部合戦状本十二巻が一旦成立した後のある時期に、別個の人が灌頂巻を作って附加したかの感を懐かせるものがある。」という見地に立って、その「六道」は、「片仮名古活字三巻本・七巻本・九巻本の如き著しく増補された宝物集を主たる原拠にしている。」と結論づけられた。「著しく増補された宝物集」という規定は、その背景に氏独自の諸本成立過程論を控える。⁽⁵⁾これを受

けて小泉氏⁽⁸⁾は、大局的には渥美氏の結論とほぼ同一見解に立ちつつ、片仮名古活字三卷本・七卷本・九卷本を主とする種々な宝物集を座右に用意したという渥美説を一步押し進めて、「四部合戦状本灌頂巻が典拠とした宝物集は、第二種七卷本系のもので、恐らくこの系統一本だけであろう。」と結論づけられた。

両氏による考察の意義は、特異な内容を有する四部合戦状本の灌頂巻が、宝物集に依拠して構成されているという事実の考証にある。これに対し、私が本稿で試みようとする作業と考察の課題は、後藤・佐々木説を踏まえて言えば、そうした四部合戦状本の灌頂巻が編成された際にも、当然その原基となったであろう先行の「小原御幸」の物語が宝物集といかに関わっていたのか、その関連の究明ということになる。現に渥美説を受けて佐々木氏もまた、渥美氏が四部合戦状本と宝物集との交渉において指摘された共通本文のうち、「左の点は、いずれも延慶本の叙述においてもみられることを言い添えておく」として五ヶ所を指摘され、かつ四部合戦状本と延慶本との灌頂巻相当部を対観されてその異同を問題視し、両者相互の直接的交渉は認められないが、共通祖本を原拠にして、それぞれ別個に潤色添加を企てた姿が遺存しているものと推測されている⁽⁹⁾。

つまり、渥美氏の企図と方法は次のような未解明の課題を突き付けて来る。四部合戦状本の灌頂巻「六道」は、それが仮りに灌頂巻の嚆矢であったとしても、まさに灌頂巻の嚆矢であるというそのことの故に、「小原御幸」の物語の初出本文ではない。ということは、その「六道」は確かに宝物集に依拠して構成されているが、その依拠の段階を、その灌頂巻の編成時であるとは単純に判定しえなくなる。先行の「小原御幸」が既に何ほどか宝物集に依拠して成立していたとするなら、灌頂巻として特立されている本文を直接、宝物集の本文と対照し、両書の関係並びに参照された宝物集のテキストを限定するという方法には、些か手続き上の危懼を感じる。むしろ四部合戦状本の「六道」は、その灌頂巻編成に臨んで、改めて宝物集に依拠した、つまり再参照と見なされる傾向性を秘めてはいしないか。

かくて、かかる課題と見通しからすれば、灌頂巻のみの記事を祖上に上せた原拠考ではなく、その特立以前の、しかも全巻に及ぶ本文対照を経て立論される依拠関係の考察が要請されてくる。

一方、直接の依拠関係が実証されても、この物語の、謎多い成立過程の解明のためには、新たな立場と方法が要請される。現に水原一氏は、渥美説の内容を認めつつも、「六道」の構成は、他資料からの思いつきによって机上に生み出されたのではなく、「現場の語りの生態」の働きかけを通して「説話の形成活動」がなされたという立場に立つて「六道」の形成を究明される。⁽⁴⁾ 伝承譚や「語りの生態」の側面は、時空の広がりの中で、動的な魅力に満ちている。しかし本稿の立場は、今一步引き下がって、延慶本が静かに机上で編み上げられていった筆の運びを、遡る如くに追尋することになろう。

独自の編集作業を経て成立した平家物語の諸本は、宝物集とも独自の関係を結ぶ。単なる典拠の考証に留めず、依拠を通して、期せずして覗かせることになった作者の自作理解の一端にまで触れてみたい。

本稿に取り上げた宝物集諸本は、一卷本（統群書類従所収）、二巻本（国会図書館旧上野分館本・古典文庫77校合）、平仮名古活字三巻本（古典文庫77底本の混合本）、片仮名古活字三巻本（統群書類従所収）、第一種七巻本（大日本仏教全書所収）、第二種七巻本は、吉田幸一氏蔵九巻九冊本（古典文庫258所収）、光長寺本（巻一のみ）・本能寺本（巻三のみ）・最明寺本（巻四のみ）（いずれも古典文庫283所収）、身延山久遠寺本（未刊国文資料所収）である。⁽⁴⁾ 他にも重要な諸本が紹介されているが本稿では参照できなかった。また、論述に際しては、対照本文をいちいち引用しないで、むしろ結果のみを示してゆきたいと思う。

また、延慶本の本文は古典研究会の影印版に依り、長門本は国書刊行会版に依った。

一 故事

中宮徳子の皇子御産に添えられている二つの「もののけ祓い」の故事、入道清盛の他界に続く四つの経文・故事は、いずれも宝物集に依拠して編み込まれた延慶本編集著述者の手になる著述部である。長門本はこれを切り捨て、四部合戦状本にも復活していない。どれを取っても、当時としては著名な故事・経文であるが、宝物集の特定伝本の本文の近似は、他にどのような解釈を許すであろう。

身延山久遠寺本『宝物集』

① () 染殿ノ后ハ。清和ノ御時ノ国母ニテ。

一天下ヲ靡給ケルニ。紺青鬼ト云御物ノケ

ニトリコメラレテ。世中ノ人ニサカナクイワレ給

事侍リケリ。智証大師。御持僧ニテヲハシ

ケレトモ。()

力ヲヨハテ

ヤミ給ニケリ。

(第二分—四六頁)

延慶本『平家物語』

昔シ染殿ノ后ト申シハ清和ノ () 国母ニテ

一天下ヲナヒカシ給ヘリシ程ニ紺青鬼ト云御物ノケ

ニ被取籠テ世中ノ人ニモサカナクイワレサセ給

事侍ケリ。智証大師ノ御時ニテオワシ

ケレハ様々ニ加持セラレケレトモ不叶シテ

ヤミ給ニケルニ(第二本八「中宮御産有事」一一五頁)

宝物集諸本では、一卷本にはあるが文章の異同が多く、二巻本・平仮名三巻本になく、片仮名三巻本にもあるが文章に若干の異同が生じており、第二種七巻本の吉田本はほぼ身延山久遠寺本と同文である。上下の対観で分かるように、傍線部は延慶本における表現上の敷衍で、傍点部は言い換えである。冒頭の「昔シ」は、延慶本の編集著述者が、単に宝物集からに限らず、広く説話集・寺社縁起等から故事を引く場合に、しばしばその頭に置く編集語である。ここでは、染殿の後の故事を編入するに際して、その前後にいわゆる額縁として附された編集句

今度ノ御座ニサマノ事共有ケル中ニ目出カリケル事ハ太上法皇ノ御加持有カタカリケル御事也。……

……不叶シテヤミ給ニケルニ今ノ法皇ノ御驗者ニ御物ノ氣ノ譏嫌返々目出クソ覺ヘシ。

の「今度ノ」とか「今ノ」に対応していることになる。つまり「昔」に照らして「今」を測定する。それは延慶本の編集著述者が一貫して採択している出来事批評の方法である。ここでは智証大師の故実を説話として呼び起こすことによって、後白河法皇の御驗者ぶりを「目出シ」と評価する視座が確定する。ちなみに、染殿の後の故事を宝物集は、八苦の第三、病苦に属する「もののけ祓い」の例示として掲げている。なお、「目出シ」という批評語が、延慶本では、その編集著述者の価値観を表わす批評上の編集句に属する事実は、既に別稿で指摘した。即ち『六代勝事記』『続古事談』に依拠する本文の編集上の額縁と、『宝物集』に依拠する本文の額縁とは、その用語において傾向を一にしている。延慶本の成立過程の、恐らく同じ段階での作業の成果であろう。

直ぐ続いて、延慶本にもう一つの「もののけ祓い」にまつわる故事が採録されている。やや長文に及ぶが、本文対照の結果を重視したいので全文を引く。

身延山久遠寺本『宝物集』

② (一) 三条院ノ宇治殿頼通ヲ。御聲ニ取ムトセサセ
ヲハシマシケルニ。御病ツキテ。大事ニナリ給テ。

驗者ニハ心養僧都明尊阿闍梨。陰陽師ニハ賀茂ノ光栄

安倍ノ吉平ナムト。カラ尽シ。声ヲアケ

ノ、シリケレトモ。タ、ヨハニナリ給テヒキ入 (一)

給ケルヲ。御堂 (一) 道長 (一) ノオハシマシテ。

日本国ニ法花経ノコレ程ニ弘セ給ハ。我力ナリ。

延慶本『平家物語』

又三条院ノ宇治殿頼通ヲ御聲ニ取ムトセサセ
オハシマシケルニ御病付テ大事ニナリ給テ

驗者ニハ心養僧都明尊阿闍梨陰陽師ニハ賀茂ノ光栄

安倍ノ吉平ナムトラメシテ音ヲアケテ

旬シリケレトモ只ヨハリニヨハラセマシテ引入ラセ

給ケルヲ御堂関白道長公ノオハシマシテ

日本国ニ法花経ノ是程ニヒロマラセ給フハ我力也

此度我子ノ命イケサセ給へ。トテ涙ヲ流シテ寿量品ヲ

一枚計読給ヒケレハ。御シウトノ具平親王物ノケニ

アラハレ給テ。子ノカナシサハ誰モ同シ事ニテコソアレ。

我子ニ物ヲ思ハセンスルコトノ悲シケレハ。

ツキ奉リタレトモ法花経ニカタサリタテマツリテ

返リ侍リヌト言テ御病ヤミ（給ヒ）ケリ。

（第七分——一八八頁）

本文の性格は①の場合と同様で、延慶本の側に若干の敷衍・換言が認められる以外、ほぼ同文と判定される。身延山久遠寺本と同じく第二種七巻本に属する吉田本では、「御堂道長……具平親王」間の本文が次のようになっている。

…御堂道長のおわしまして、寿量品を一枚ばかりよみて、御かほにあてゝ、日本国に法華経の是程にひろまり給ふ事は、我力なり。我子の命たすけ給へ、とおめきたまひければ、御しうとの具平親王……（九—四二四頁）

つまり寿量品の読み上げが先きに來て、道長の祈願の詞が後になっている。また、「涙ヲ流シテ」が捨てられ代わりに「御かほにあてゝ」や「おめきたまひければ」という振舞の具象的な表現が付加されている。他の伝本の本文の性格はいちいち紹介しないが、身延山久遠寺本や延慶本『平家』から遠い略述の異文になっている。同じ第二種七巻本の瑞光寺本・古川泰雄氏蔵本は未見のため断定は避けたいが、身延山久遠寺本は延慶本成立時代の『宝物集』の本文の状態を、部分的には十分に遺存していると判定してよいのではないか。と同時に、他の随所にこの傾向は窺えるのであるが、延慶本『平家』に関する限り、『宝物集』の依拠本文を吉田幸一氏蔵本に頼って対照する方法には、厳密性という意味で限界がある。

ところで、宝物集がこの故事を収録する巻七は、浄土往生の道十二門中の第九門から十二門までを説く問答の大詰

コノタヒ我子ノ命生サセ給ヘトテナミタラ流テ寿量品ヲ

一枚計リ読給ケレハ御シウトノ具平親王物ノケニ

アラワレ給テ子ノ悲シサハ誰モ同シ事ニテコソアレ

我子ニ物ヲ思ワセムコトノ悲シケレハ

付奉タレトモ法花経ニカタサリ奉テ

帰リ侍ヌト宣テ御病止（ ）ニケリ。

（第二本八「中宮御座有事」一一五〇六頁）

に相当し、当故事は第十一門「法花経ヲ修行シテ仏ニ成ルベシ」の条に収められている。しかし延慶本の編集著述者は、必ずしもこの故事を法華経礼讃の主意に沿って是用いていない。①の故事で智証大師の加持の失敗に引き比べて、後白河法皇の驗者ぶりの「目出サ」が強調されたように、ここでは心養僧都以下に連記されたその道の専門家達の不成就をこそ強調することによって、念を入れて後白河を引き立てておこうとする意図を露わにしている。引用を受ける纏めの編集句、

カ、ル事ヲ思ニハ法皇ニ御物氣ノ恐奉リケルモコトハリ也。

は、こうした延慶本の編集著述者の後白河院観を存分に表明している。裏を返せば、それは平家一門の榮華の極点ともいえる皇子誕生の場を、『山槐記』に依拠して事細かく記述しながらも、編集著述者の関心は決して素直にその極点には集束していないという、この編著者に特有の発想方法の特質にも通う。つまり、その後白河院観、記事構成法のいずれに照らしても、延慶本の「中宮御産」の章は、延慶本の著述部が有する固有の特質を含み、宝物集の故事もまたその特質の中に援用されていると解釈されよう。

卑見に依ると「中宮御産」の章は、まさに延慶本の著述部であるが、次に考察する「入道清盛他界」の章もまた、先行する清盛伝承を多く採取して再構成された著述部と判定される。数万騎の軍兵、一家の公達に取り囲まれつつ只一人死出の山路を越えたという死去の物語を採り入れて、延慶本の編集著述者は、「造置レシ罪業ヤ身ニ添ラム」と突如、自らの筆を起す。その筆鋒は、仏法を基底としているゆえに、激しい「生の断罪」を可能にしている。基底となる仏法の規範として二つの経文、二つの仏教故事を宝物集から引く。

身延山久遠寺本『宝物集』

③摩訶止観云。冥々トシテ独リ行ヲ誰訪ニ是非一

延慶本『平家物語』

摩訶止観ニハ冥々トシテ独リ行誰訪ニハ是非一

所有ノ財産徒ニ為_ニ他ノ有_トイヘリ。

(第二分一五三頁)

△吉田本『宝物集』▽

④俱舍論には、(いまだ死せざるさきだに、中有の有リさまをば申てぞ待るめる。)

再生汝今□盛位 至衰將近焰魔王
欲往前路無資糧 求住中間無所止

(二一一三頁)

身延山久遠寺本『宝物集』

⑤焰魔王ノ使ハ高貴ヲモキラハス。()

無常ノ殺鬼ハ賢愚ヲモ不簡ハ。(堯帝・舜
帝ノ賢主。音ニノミソ聞ヘ給フ。延喜・天曆
ノ聖ノ帝。影ヲタニモ残シ給ハス。三平三道ノ
臣。亦復如是。)楊貴妃・李夫人ノタヘタ

リシ姿タ。牛頭馬頭情ヲモノコサス。衣通姫・小野小町
カ艶シカリシ。阿妨羅刹ハ恥ル事モ無リキ。秦
始皇ノ虎狼ノ心アリシ。梁ノ武王ノ勇ミタケカ

リシ。頼光・頼信カハカリコトノ賢カリシ。(維衛・
須頼カ人ニヲチラレシ。)一人モ留ル事無ク。皆三途
ノ故郷ヘカヘリキ。(第二分一五三頁)

⑥()金峯山ノ日藏聖人カ無言斷食ニテ行ナヒ
シケル程ニ秘密瑜伽ノ鈴ヲニキリナカラ死ニ入タル事侍
リケリ。

『宝物集』と延慶本平家物語

所有ノ財産徒ニ為_ニ他ノ有_ト明シ。

(第三本十三「太政入道他界事」二一三二六頁)

俱舍論ニハ

再生汝今過_ニ盛位_一 死_テ遂_ニ將_レ近_ニ焰魔王_ニ

欲_レ往_ニ前路_一ニ無_ニ資糧_一 求_ニ住_ニ中間_一ニ無_ニ所止_一
ト申テ (同前)

炎魔王ノ使ハ高貴ヲモキラウス魂ヲウハウ。

獄卒ハ賢愚ヲエラフ事ナシ。()

()楊貴妃李夫人ノ妙ナ

リシ姿牛頭馬頭ハナサケヲノコサス。衣通姫小野小町
カ心ノヤサシカリシ阿妨羅刹ハ恥ル事モナカリキ。秦
始皇ノ虎狼ノ心アリシ梁武王ノ勇ノタケカ

リシ頼光・頼信カ計事ノ賢カシモ ()

()冥途ノ使ニハ叶ハサ

リキ。

(同前)

昔シ金峯山ノ日藏上人ノ無言斷食ニシテ行ヒ
スル間秘密瑜伽ノ鈴ヲニキリナカラ死入タル事侍ケリ。

地獄ニシテ延喜ノ聖王ニ奉テ値ケレハ。(帝ト。聖人ヲ見テ言ク) 地獄ニ来ル者ノ再ヒ人間ニ帰

事ナシ。(一) 汝ハヨミカヘルヘキ者也。我レ。父寛平法王ノ為ニ不孝ナリキ。又。無実ヲモテ菅原右大臣ヲ流罪シタリキ。此罪科ニヨリテ。(今) 地獄ニラチテ苦患ヲウク。必ス我王子ニ語テ苦患ヲ弔ヘシ。ト仰有ケレハ畏テ承ケレハ。冥途ハ罪無ヲモテ主ルシトス。聖人我ヲ敬事ナカレ。ト仰セラレケル。(一) コソ悲ク侍レ。

(第二分—三九頁)

地獄ニテ延喜御門ニ会マヒラセタル事アリキ。(一)

(一) 地獄ニ来ル者一度閻浮提ニ帰ル

事ナシトイヘトモ汝ハヨミ返ヘキ者也。我父寛平法

皇ノ命ヲタカヘ無実ヲ以テ菅原右大臣ヲ流罪

セシツミニヨリテ地獄ニ落テ苦患ヲ受ク。

必ス我王子ニ語テ苦ヲスクフヘシト仰有ケレハ

畏テ承ケルヲ冥途ハ罪ナキヲ以テ主トス

聖人我ヲ敬フ事ナカレト被仰ケル事コソ悲シケル。

(同前・二一—三二七頁)

以上の四記事は延慶本では一連に構成されているが、宝物集では③④⑤は人間道八苦の第四「死苦」を説く条に、⑥は地獄道を説く条に収録されている。先ず本文の実態を検討しておく。③と④は経文という成文の性格から、宝物集諸本と延慶本との対照をもってその相関を判定することはむづかしい。特に④は身延山久遠寺本は抜き書きしていない本文である。参考までに吉田本から引いたが、第二句の相異が目につく。⑤の傍線部は①②の場合と同様に延慶本の敷衍、傍点部は表現の改変であるが、とりわけ延慶本の括弧空欄はその編集著述に際し切り捨てた部分と考えられる。前後に二箇所あるがともに古の貴顕の列挙であり、恐らく編集著述者の関心を積極的に掻き立てなかった名であろう。⑥は醍醐帝の墮地獄苦患の説話である。冒頭に「昔」を置くのは①に同じ。細部の本文批評を通して身延山久遠寺本の本文を引く必然性に触れよう。引用二行目の「死ニ入タル事侍リケリ」は吉田本(八八頁)では「死入侍りける」、片仮名古活字三卷本・第一種七卷本では「死ニ入タル事有キ」、平仮名三卷本では「しに入たるに」といづれ

にも小異あり。延慶本と身延山久遠寺本はびたりと合致している。つまり身延山久遠寺本は抜書本とはいえ、その祖本の本文状態をかなり忠実に書写している部分も多いと判定される。

さてその内容であるが、③④⑤は本来、死苦の逃れ難さを説く經文・故事であるから、一人清盛に限ってこれを、断罪するのは当を得ない。人間道の苦としてそれは普遍的課題であつた。しかし編集著述者が⑥に墮地獄の物語を並べ置いたとき、死苦もまた墮地獄と同義的な要素を帯びて、清盛の今生の振舞の断罪に直結したといえる。⑥に続く編集句

賢王聖主猶地獄ノ苦患ヲ免レ給ハス。何況入道ノ日比ノ振舞ノ鉢ニテ思ニ後世ノ有サマサコソオワシマスラメト思遣コソ糸惜ケ
レ。

はそれらの意図をよく表明している。しかもここでも、賢王聖主の地獄苦患は清盛の来世の有様を推量する照準として述べられている。いま一点、着目しておきたい特徴は、清盛の今生の振舞いを裁いて、「六道」のうち「人間道」と「地獄道」を説く教理を踏まえている事実である。この特徴を「六道廻り」の一端と解するのはやや短絡の嫌いがあろうが、『往生要集』の内実を普及的啓蒙的に継承している『宝物集』の思想を十分に反映していると解することができる。そしてその反映の本格的な達成点は「小原御幸」の章の編集著述である。現に、同じ日歳上人の地獄往還説話は、改めて二度までそこに援用されている。この点は後に触れよう。

二 和歌

延慶本の和歌と宝物集諸伝本の所収歌とは合わせて十首が重なっている。この内に第二種七卷本系伝本にのみ収め

られている和歌が二首ある。

⑦イツクモ旅ノ空ハ物哀ニテモラヌ岩屋タニモナラ露ケキ習ナレハ御涙ソ先立ケル。ソレニ付テモ昔今ノ事思召ノコス事ナキマ
、ニハ

ナケキコシミチノツユニモサリケリフルサトコフルソテノナミタハ

ト王昭君カ胡国ニ旅立テ歌ケンモ理也トテ更ニ人ノ上トモ思召サ、リケリ。

（第六本廿二「建礼門院吉田へ入せ給事」三―四三五頁）

帰洛後の女院が草深い吉田の辺の荒邸に、身を宿す日の感懷である。和歌は赤染衛門のもので『赤染衛門集』に見え、『後拾遺集』第十七雜三にも収められている。『平家』では長門本にも四部合戦状本にもこの部分はない。

矢場に細部の考証に入ることになるが、この和歌の第四句ハフルサトコフルは多くの場合次のように伝えられている。即ち、『赤染衛門集』（桂宮本・群書類従本）『後拾遺集』（八代集抄本・国歌大観本は）ともにハなれにしさとをVである。宝物集第二種七卷本でも、吉田本（二五三頁）本能寺本（七七頁）はともにハなれにし里をVである。⁽⁴⁾ところが、身延山久遠寺本（第三分―七四頁）に限ってハ古郷コフルVと延慶本に重なっている。この一事を先ず注目しておきたい。

また、延慶本が和歌の前後に添えた編集句も、恐らく宝物集の王昭君故事の解説

王昭君カ王宮ヲ出テ胡国ヘ行シサマ。胡国ノ后トハモテナセトモ。ナラハヌ旅ノ床露ケク。月ノ光リハハヤケレトモ。涙ニク
ラサレテクモレリ。

に依拠する構成であろう。延慶本の編集著述者は、女院の感懷の形象のために、王昭君故事を詠む和歌を引きつつ、女院をして、嘗て王昭君も洩らしたであろう嘆息の当然性を「理也」と、しみじみと追体験せしめている。ここでは

「今」を媒介として「昔」を再認識する発想が用いられている。前項②に続く編集句にも、やはり「コトハリ也」が用いられ、そこでは故事を参照して現実が量られた。いずれにしても、延慶本の編集著述者が、自らの展叙し続ける出来事の断面と、その断面が呼び起こす過去の事実の数々の中に、「まさにもっともなことだ」と領き得る、いわば納得の基準を、絶えず問題にしていたことは事実である。編集著述者にとって宝物集は、そうした納得の基準としての古き事実の宝庫であつたらしい。

延慶本が収めている第二種七卷本独自の歌のもう一首は、

⑧見ル度ニ鏡ノカケノツラキカナカ、ラサリセハカ、ラマンヤハ

(第一末卅二「漢王ノ使ニ蘇武ヲ胡國へ被遣事」——三九七頁)

である、『後拾遺集』卷十七雜三に作者懷円法師として撰入。宝物集では \wedge ナゲキコシ \vee の歌の直前に、王昭君を題材にする歌群の一つとして配列されている。長門本はこの歌を欠き、四部合戦本はこの巻欠本である。平家物語の「蘇武」については、笠菜治氏の「糸譜稿」があつて、氏の考察に依ると特に延慶本の場合に限られてはいないが「蘇武」は、宝物集の発想を基層に、文選的、また和歌的蘇武伝を配することによって経糸を創り出したと考えることが出来るとされている。

ところで、この歌の初句 \wedge 見ル度ニ \vee は、『後拾遺集』では延慶本と同様に \wedge 見る度に \vee となっているが、宝物集諸本には、身延山久遠寺本をも含めてすべて \wedge ミルカラニ \vee となっている。そして第四句 \wedge カ、ラサリセバ \vee は、吉田本のみ \wedge かゝらましかば \vee と異なっている他は、すべて延慶本と同様である。吉田本が、比較的延慶本とは様態を異にしている事実は既に述べたが、この観点から推して第二種七卷本中では、後出本と考えることもできよう。

⑦⑧とともに『後拾遺集』から第二種七卷本宝物集に採入され、延慶本編集著述者の目に止まったと判定される

が、⑦が身延山久遠寺本に直結するとしても、⑧は現在宝物集には直結せず、むしろ『後拾遺集』に遡ることになりかねない。とはいえ、他の例から推して、⑧に限って『後拾遺集』からの直接引用説を掲げねばならないという推定は、笠氏の考察に照らしても根拠が薄い。延慶本の「蘇武」の章の成立については、必ずしもその依拠資料の全貌が解明されていないが、和漢の故事に明るい延慶本の編集著述者のことであるから、久遠寺本に依拠しつつ、歌詞を勅撰集の姿に引き戻して引用したかと推考しておく。

問題の困難は、久遠寺本が抜書本に過ぎないという性格からも来ている。しかし、抜き書きの随所に見える日意上人の注記から推して、その親本が、第二種七卷本系伝本の形態並びに本文を有する、しかも完本であつたらしいという判定が可能である。延慶本の編集著述者が依拠した伝本の確定は、いまやほとんど不可能であるが、逆にいずれの宝物集が延慶本本文に近いかを認定する方法を通して、その伝本の祖本の系統上に、現在、第二種七卷本として扱われている、最も大部な宝物集の、創出本もしくは比較的に創出本に近い伝本が成立していたのではないかと想定する道が開けて来よう。以下は臆説になるが、延慶本の編集著述者が依拠した宝物集は、身延山久遠寺本系の祖本に当てるであろう、と同時に、七卷本の創出本であつた可能性もまた濃厚である。抜書本にもかかわらず、細部における延慶本との本文の一致という事実、並びに、第二種七卷本系祖本の成立時期についてのいくつかの考勸⁽⁴⁾はこの臆測を補強している。

残る数首の和歌は、第二種七卷本独自の歌ではないが、上述の論旨に沿って久遠寺本を用いて対照しておきたい。

身延山久遠寺本『宝物集』

⑨伊賀（守為業へ法名）寂念ナリ。

靈山ニコモリ居テ。（角ソヨミ侍リケル。）

延慶本『平家物語』

伊賀入道寂念ナリ

靈山ニ籠居テ

現存集
春キテモ問レサリケル・山里ヲ花サキナハト

ナニヲモヒケン

(第四分一〇〇頁)

春キテモトハレサリケリ・山里ヲ花サキナハト

ナニ思ケム

ト詠シテナカメ居タリシ心地シテアカシクラシ給ケル程
ニ

(第二本廿九「左少弁行隆事」一一六二八頁)

行隆の逼塞を叙する件に引かれている寂念の和歌である。これも長門本は切り捨て、四部合戦状本にも収められていない。久遠寺本には肩に集付けがあつて、散佚歌集の一つ『現存集』の名を記す。傍点部の「ケル」「ケレ」については、延慶本のように「ケリ」となっている伝本は宝物集に見当たらず(片仮名三卷本のみ「ケレ」、詞続きから「ケリ」は不整合であるから、延慶本の書写過程における誤りといえる。初句と結句は、例によって吉田本に限って、△春までも▽△など思ひけん▽と異なっている。以下、延慶本に依って引く。

⑩ 遂ニカクソムキハテヌル世ノ中ヲトクステサリシ事ソクヤシキ

(第七分一八一頁) (第一末廿七「成親卿出家事」一一三四一頁)

⑪ 薩摩方ヲキノ小嶋ニ我有ト親ニハツケヨ八重ノシホ風

(第三分一七二頁) (第一末卅一「康頼カ歌部へ伝ル事」一一三八八頁)

ともに宝物集の作者といわれる平康頼の和歌である。延慶本の両章は、その編集著述者の採取に懸る著述部と判定される。但しこれらの和歌が康頼伝承に先在していたのか、延慶本段階での編入なのかは容易に決せられない。

⑫ 憂ナカラ其松山ノ信物ニハ今夜ソ藤ノ衣ヲハキル

(吉田本三一五七頁) (第一末卅六「讀岐院之御事」一一四二六頁)

⑬ 東風吹ハ匂ヲコセヨ梅ノ花アルシナシト春ナワスレソ

(第二分一六二頁)

⑭ 造ルトモ又モヤケナンスカワラヤ棟ノイタマノアワスカキリハ

(同右)

『宝物集』と延慶本平家物語

⑭君カスムヤトノコスヘラユク〜ト隠ル、マテニカヘリミルカナ（一巻本—二〇〇頁）

（以上三首第四・六「安樂寺由来事」二一六三五頁以降）

⑫は崇徳上皇に関する複数資料を駆使して構成された章の一首である。宝物集にも簡単な詞書があり、延慶本はこれを敷衍して著述された可能性が濃い、久遠寺本には抜書きされていないので本文対照は行わない。⑬⑭⑮は道真関係の和歌である。延慶本の道真物語はこれまた雑多な資料による寄せ集めの構成的著述部で、宝物集も資料の一つであろう。⑬は「小原御幸」に再度援用される。⑭は一巻本に独自の歌で、『大鏡』等から一巻本に改めて採取されたと考えられ、延慶本もまた、必ずしも一巻本に依拠しているという根拠もないので、第二種七巻本系伝本を対象として限定する本稿の立場からは参考にとどまる。「小原御幸」の章に、上記の他に二首の歌が宝物集から採られているが、これは次項で考察する。

要するに延慶本の編集著述者にとって宝物集は、故事に題材を求めた和歌の宝庫であり、また和歌を主とする短い故事譚の便利な集成書であったといえよう。

三 教理問答

『宝物集』は、『宇治拾遺物語』に代表される、いわゆる説話集ではなく、全巻が一定の構成に支えられている、いわば仏教の教理問答の書である。個々の故事並びに和歌はあくまで教理の説得に仕える。特に教理問答という形式にあつては、「問」はあくまで型に過ぎず、比重の大半は「答」に傾き、「答」はよって「説法」として働く。故事や故事和歌の宝庫であり、その便利な集成書の観を呈する宝物集を、延慶本の編集著述者が、単にそれらにとどめ

ず、その本来の性格としての教理問答に焦点を据え、とりわけその往生の論にひたむきに付き随い始めるのは、第六本・末に集中的に編成されている帰洛後の建礼門院関係の記事の構成においてである。一般に「灌頂卷」と呼んで了解に早い、かかる特立を見ない延慶本では、第六本・末（第十一・十二冊）に、編年体形式に依りつつ、一方でそのトータルな最終モチーフを女院の「臨終正念・往生素懷」に即応させた、いわば女院往生伝として結構されている。これらの記事群において、宝物集は、その質における支配を露わにする。「宝物集は、鎌倉時代の『往生要集』である」とは渥美かをる氏の至言であるが、平家物語の女院往生伝は、これまた「宝物集の変奏曲である」といえよう。

帰洛後の女院関係の記事とは次の八章を指す。

第六本廿二「建礼門院吉田へ入せ給事」（三一四三四頁）

〃 廿七「建礼門院御出家事」（三一四四二頁）

〃 卅一「判官女院ニ能当奉事」（三一四六六頁）

第六本 三「建礼門院吉田ニ御坐事」（三一五〇三頁）

〃 七「建礼門院小原へ移給事」（三一五一二頁）

〃 廿四「建礼門院之事」（三一五九四頁）

〃 廿五「法皇小原へ御幸成事」（三一五九六頁）

〃 廿六「建礼門院法性寺ニテ終給事」（三一六四八頁）

延慶本の成立過程を遡るといふ観点から、本稿では先ず、当の八章における著述部の一端である宝物集依拠の実態を説明しておく。それは、いづれ稿を改めて考察されることになる「小原御幸」と『閑居の友』との突き合わせによるその成立考や、灌頂卷の成立考のための、基礎的作業に連なっている。

始めの「吉田入御」の章には、⑦△ナゲキコシ▽の歌が引かれているが、既に触れたので繰り返さない。続いて「出家」の章には、年若い出家の故事を宝物集に尋ねて、次の例を引く。身延山久遠寺本（二〇〇頁）は、後半に略述があつて本文の対照に役立たない。最明寺本を用いる。

△最明寺本『宝物集』▽

⑮冷泉院二宮、三条院一品宮、いまた御としわかくて、けうどむ比丘尼のあとをおひて、仏道をもとめ給けり。
(つぎ)の人のことは申におよび侍す。

法花經六卷のはじめにも、我少出家得阿耨多羅とおほせられたれば、無上菩提をねがはむもの、かならずわかくて出家遁世すべきなり。

老後の出家ハ、つかひをえてきたる人のごとしといへり。
(巻四—一四三頁)

延慶本『平家物語』

冷泉院二宮三条院一品宮モ未タ御年若クテ
儒曇弥波提比丘尼ノ跡ヲ追テ仏道ヲ求給ケリ。

()
法花經ノ六ノ卷ノ初ニハ、我少出家得阿耨タラト被仰タリ。サレバ年少ノ出家ハ、使ラエヌサキニ来レル人

年老ノ出家ハ使ヲ得テ後ニ来人ト
例タリ。

(三—四四七頁)

宝物集の本文は諸本間に異同がある。一卷本は略述並びに後半の削除があつて役に立たない。片仮名三卷本も最後を「若クシテ出家ハ殊ニ目出度侍ヘシ。」と結んでいて、延慶本に合わない。第二種七卷本では、吉田本が「老後の出家はつかへおゐてきたり人のごとしといへり。」と誤写を認めうる。久遠寺本は、先述の如く、引用の始め三行で抜き書きを断ち、後半を伝えていない。しかし幸い、最明寺本が、延慶本に近い本文を伝えていて、延慶本における換言の跡をも明確にしてくれる。恐らく身延山久遠寺本の親本も同様であつたであらう。と同時に、延慶本の本文を媒介とする宝物集の本文批評に言及しておくなら、小泉弘氏の⁽⁴⁾第二種七卷本系統における「最明寺本は古形を示す」という見解は極めて的確であり、瓜生等勝氏の⁽⁴⁾身延山久遠寺本の親本と、最明寺本との兄弟説は、例えば兄弟とまで

は断定しえずとも、至近の關係説として、これまた、妥当と考えられる。

内容は、浄土に往生すべき道十二門中の第一門、道心をおこし、出家遁世して仏道を求むべしに属す故事であるが、特に「女人出家」の例示に移る冒頭の一節である。しかも宝物集は、冷泉院二宮・三条院一品宮の出家を単に「女人出家」の例示とするに留めず、「いまだ御年若くて」に焦点を移すことによって、『法華経』六の卷の「年少出家」の教理を説き起こす契機としている。延慶本の編集著述者は、正しくこの点に関心を寄せて、建礼門院の出家に即応する故事として上記⑮を引いたと考えられる。⑮に続く編集句

シカレハ女院モ末タ御年若クテ御出家アル事ハ弥ヨ後世ノ御事ハ湊クソ覚ユル。上代モタメシナキニアラス。マシテ此御有サマニハイカテカ思召シタ、サルヘキ。今更驚クヘキ御事ニモアラス。

は編集著述者の編入の意図をよく説き明かしている。ここでは「昔」と言わずに「上代」と言う。同じ編集著述者の作業に違いなからうから、彼の「昔」が、また「上代」として理解されてもいたという時代の区分意識を窺うことが出来る。長門本に移って、女院出家の記事は、巻第十八（六八七頁）の編年体部分と、巻第二十（七四六頁）の灌頂卷寂光院の部分に重複して現れるが、そこには「年少出家」への関心が欠落するために、この故事は引かれていない。四部合戦状本の灌頂卷の成立については、別に論を立てる予定であるが、長門本の未成熟な灌頂卷寂光院を基底に、これを不満として大掛りな再編集を企図した形跡が濃厚で、宝物集依拠の故事を多数収録しているが、「年少出家」の関心を欠いたままであるから、この故事は甦っていない。

この章には、他に鳩那羅太子や上陽人の故事も引かれているが、宝物集に依拠すると証するだけの本文上の重なりはない。

次に宝物集依拠の記事が編入されているのは、「小原御幸」の章である。法皇の一行は先ず、清原深養父の建立に

なる補陀落寺に入る。その聴聞所の障子絵には、四季に随い折に触れたる無常觀念の様や、六道四生三途八難の苦患の様が描かれていたという。その「六道絵」に触発されて、醍醐帝墮地獄の説話を詠んだ古歌が引かれている。

⑬延喜ノ聖主ノ地獄ニ墮サセ給テ金峯山ノ日藏上人ニ向セ給テ

イフナラクナラクノ底ニヲチヌレハ利利モ首陀モカワラサリケリ

ト炎ノ中ニシテ悲セ給ケムモカクヤト哀ニソ被思食ケル。是ニ付テモ穢土ヲ厭ヒ淨土ヲ願フセ給ヘキ御心ノミソ深カリケル。

(三一五九八頁)

醍醐帝の墮地獄の説話が清盛死去の場に引かれている事実については既に触れた。但しそこでの引用はこの歌にまでは及んでいない。つまり同一の題材を説話と和歌とに引き分けて、地獄描出を具象化したと言える。そしてここでは、さしもの聖帝の墮地獄説話を不断に想起することによって、自らの欣求淨土のいわば反面教師とし続けたと解釈に立脚して、編集著述者の後白河法皇像が構築されている。ところでこの歌の場合、宝物集の本文に若干の疑点がある。その二・三句が身延山久遠寺本（第二分一四〇頁）ではハナラクノ中カニ入リヌレバノとなっており、吉田本（八八頁）ではハならくの底に入ぬればノとなっている。一巻本や三巻本も吉田本と同じである。これらに対し延慶本に重なる表現を有するのは、二巻本のみである。宝物集ではその作者を高岳親王と記し、これは恐らく宝物集の集付けが明かしているように、『俊頼髓腦』の「高岡の親王弘法大師によせ給ふ歌」に基づくであろうが、『袋草子』では弘法大師を作者としているように伝承が乱れており、歌詞も幾通りかに伝わったと考えられるので、私は、この場合、延慶本の編集著述者が、身延山久遠寺本系の祖本の他に、二巻本系の伝本を机上にしていたという推察は立てない。諸本では、長門本も四部合戦状本も、補陀落寺の光景を描かず、「補陀落寺をがませ給ひつゝ、小塩の山の麓、芹生の里、大原の別墅寂光院へぞ御幸なる。」（長門本・七五二頁）と筆を一路寂光院の場へと進めている。焦点を寂

光院の場に絞るための場面急ぎに他ならない。

「閑居の棲」の光景に移って筆は庭から庵室の内へと入る。既に渥美・小泉両氏の論文で四部合戦状本に基づく宝物集との対照が詳細に試みられているが、延慶本の場合、若干の差異も見られるので改めて考察しておきたい。先ず、女院の手すさみとして紹介の

⑭ 諸行無常是生滅法生滅々已寂滅為樂

(三一六〇四頁)

の四句の偈は宝物集第二分(三〇頁)に見える。もちろん著名な句であるから宝物集依拠と断定するところではない。長門本は庭から庵室へ入る描写を鮮かに整理しており、⑭の文句も捨ててゐる。四部合戦状本は、庭から庵室内の光景に直入する描写の手順を憚って、先ず案内を請い、貞憲女阿波内侍の登場を先き立てる。実定卿の登用とともに四部合戦状本の構成上の特徴である。

四句の偈の内容を敷衍して、「雪山の鳥」「羊の歩み」の成語を用いる。ともに第二分(四二頁)第三分(六九頁)に見える。続いて諸経の要文、様々の詩歌を列挙している。

⑮ 極重惡人 無他方便 唯稱弥陀 得生極樂

⑯ 謗法闍提 廻心皆往 十惡五逆 罪滅得生觀經心

⑰ 一切業障海 皆從妄想生 若欲懺悔者 端坐思夷相

⑱ 若有重業障 無生淨土因 乘弥陀願力 必生安樂國

⑲ 法身体遍諸衆生 客塵煩惱為覆藏 不知我身有如來 流轉生死無出期

⑳ 又參川守定基法師力清涼山ニ住ケル時詠シケル

笙歌遙聞孤雲上 聖衆來迎落日前 草庵無人扶病臥 香爐有火向西眠

(以上三一六〇五頁)

㉑ は宝物集の諸本に見えないが、延慶本の構成を見渡すために掲げた。その他はすべて宝物集に依拠している。㉒

は宝物集吉田本の第九冊(四三六頁)に、⑳⑱の順に収められている。(身延山久遠寺本は当の「弥陀を称念して仏道を成べし」以下を「指タル所用無キ故ニ略之」として抜き書きしていない。)㉑は第六分(二四〇頁)の「業障ヲ懺悔シテ仏道ヲ成ヘシ」に見える。㉒は第六分(二五八頁)の「観念ヲ凝シテ仏道ヲ可成」に見える。第一句は「法身遍満……」である。㉓は第七分(一七九頁)の「善知識ニアヒテ仏ニナルヘシ」に定基の説話とともに見える。延慶本では漢詩の一・二句と三・四句が入れ替えられている。以上の内容を見るに、⑱弥陀の称念、㉑業障懺悔、㉒弥陀の願力、㉓観念、㉔善知識の順に掲げられており、その配列に内容上の必然性はなく、むしろ要文詩句の型に拘泥して、四言五言七言の詩句を二首ずつ配列したと判定される。㉕は、この意味で宝物集以外から四言詩体の番として持ち込まれたのではなかったか。

これに対し長門本は⑱⑳㉑㉒の順、つまり宝物集に出て来る順に配列を動かし㉕を捨て、また㉓の詩を正したといえる。そして四部合戦本では、㉑㉒㉓㉔の順に改め、㉕を当節から削ったといえる。補われた㉑は、宝物集第六分(一四〇頁)に㉑に接続している。

㉑衆罪如霜露 恵日能消除 是故応至心 懺悔六恨情

である。結局、弥陀の称念と業障の懺悔が強調される姿となっている。つまり内容中心の引用に改変されたといえよう。こうして四部合戦本は、⑱の四句の偈と「雪山の鳥」「羊の歩み」を挿入して㉓の参河入道の詩を配置する。但し定基の呼称は寂照法師と呼び換えられ、延慶本や長門本の知らない「竹林寺」という清涼山の麓の寺名が持ち込まれることになる。いずれの宝物集にもこの寺名は見えない。

延慶本は女院の庵室内の描写を終えて漸く、老尼の過現末の因果に関する問答を展開させる。それは女院との六道問答の、明らかに前哨を構成している。老尼、実は貞憲女・阿波弁内侍の説く教理に、檀徳山の採薪・結水の記事が

あつて、内容的には宝物集第五分（一三〇頁）第六分（一五一頁）等に重なるが、本文的には直接の依拠とは判定し難い。恐らく宝物集を契機としていゝるであらう。

続いて六道問答に入つて、法皇の言葉

②③ 天ニ登リ海ニ入シ四梵士（三一六一八頁）

も第二分（五三頁）の「天ニ昇リ。海ニ入リシ。市ニマシリ。山ニ埋モレシ四梵士。」の表現に依拠している。

女院の六道経歴語りは天上楽（宮廷時代）に始まり、天人の五衰相現の悲（都落以降）への失墜へと移る。この移行点に纏めの句が次のように入る。

身延山久遠寺本『宝物集』

②④ （天_ニ上_ヲ申セハ）化樂無數ナリト云ヘト

モ。ツイニ五衰ヲマヌカル、事ナシ。

②⑤ 是ヲ以テ。正法念経ニハ。天上欲退_シ時_ニ心_ニ生_ス大苦

惱_ニ地獄ノ衆苦_ヲ毒_ヲ十六不_レ及一トハ宣タルナリ。

（第三一八三頁）

延慶本『平家物語』

（……船底ニテ伝ニ聞侍シカハ）快樂無窮ノ

天人ノ五衰相現ノ悲トハ是ニヤト覺ヘテ

（サレハ天上欲退_シ時_ニ心_ニ生_ス大苦

惱_ニ地獄衆苦_ヲ毒_ヲ十六不_レ及一ト説レタルモ此理ニヤ

（三一六二一頁）

宝物集では六道の最終、天上の項に述べられている五衰と失墜の苦である。延慶本は女院の生涯に教理を適応するとき、宝物集の叙述を、いわば遡る如くに、天上の楽から、五衰と失墜の苦を展叙する。四部合戦状態では、②④が約まつて「是非五衰悲耶」となる。延慶本における「理」の強調は、②⑦の編集句と動機を一にしている。

人間界に移つて、その四苦八苦の様については、簡略に「愛別離苦」「怨憎会苦」の言葉に表象を預け、修羅道を叙べて餓鬼道に入る。

身延山久遠寺本『宝物集』

②⑥(餓鬼道ヲ申サハ) 無量ノ苦患ヒマナシト云ヘ
トモ。(惣テ) 飢饉ノ患ヘ難レ忍ヒ。得()戸
羅城ノ餓鬼ハ。⑤百歳食ヲ不_レ得テヲウヤシ。
師子国ノカキハ。⑦返海ノ山ニナルヲ見ルマテ
食ニ不_レ値。
或ハ自ラ
ナツキヲ破リテ食ヒ。或ハ子ヲクラヒテ飢ヲタスク。
() 我夜生五子 随生皆自食ハ昼生其亦然
雖尽而不飽ト申ハ是也。
②⑦(百菓結_レ林ニ欲ハレ取_レ刀葉ナリ)
万水入_ル海ニ 欲_レ飲猛火ヲト申ハ是也。

(第二分一四二頁)

西海の漂泊を餓鬼道の苦患に準えて、その末尾に教理との照応を宝物集依拠の本文で結ぶ。②⑥の対句①⑤を延慶本は入れ替えている。編集著述者の必ずしも趣味のよくない趣向としてこの他にも例が多い。「我夜生五子」の詩句を、身延山久遠寺本は初めの二句のみで抜き書きを怠っている。後の二句は吉田本で補った。編集著述者は、經典の言葉を現実世界において目のあたりにした女院の体験を通して、経文の「理」をいちいち驚きを籠めて再確認してゆく。いわゆる壇の浦合戦は地獄道に準えられる。ここには四つの依拠本文が含まれている。

身延山久遠寺本『宝物集』

②⑧央掘摩羅。外道ノ説ヲモチテ。千人ノ指ヲ切テ。
アミアツムヘキ願アリテ。九百九十九人切ツ。仏ケ。是
ヲアハレトラホシテ。(以下略) (第七一―七七頁)

延慶本『平家物語』

() 無量ノ苦有_ルト云
トモ() 飢饉ノ憂ヲ先_ニトス。徳刃戸
羅城ノ餓鬼ノ。⑥大海ノ七度変シテ山トナ
ルマテ飲食ノ名字ヲ聞ス 又師子国ノ餓鬼
ノ五百生カ間食ヲ難_レ得シテ子ヲウヤシ 或ハ自カ
脳ヲ擡テナヤミ。或ハ子ヲ生テ食トス。
サレハ我夜生五子 随生皆自食 昼生五亦然
雖尽而無飽ト云ヘル文モ理也
()
衆流海ニ入トモ飲ムトスレハ猛火也ト云ヘル文モ理也。

(三一六―二七頁)

延慶本『平家物語』

央掘摩羅ト云シ外道ノ仏ヲ奉_レ打ムト
シケルモ(次に続く)

②⑨ 昔、仏生国ニ血ノ雨ノ下リテ。国土クレナキ

ナリケレハ。御門。大ニアヤシミ驚キ。(中略)

舎エ国ノ内ニ。其夜生レタル子ヲ召シ(以下略)

(第七—一七六頁)

又化影国王ノ人ヲ殺シケムモミヌ事ナレハ
是程ニハアラシト覚キ。

(三一六三〇頁)

②⑧ 延慶本ではひと続きの文である。宝物集では、ともに極重悪人が善知識に会って得脱する仏教説話として②⑨の順に引かれている。延慶本は、二つの説話を、必ずしも内容に則することなく、熾烈な流血が行なわれた場面の例示として引くにとどまる。②⑨の「化影国王」は恐らく「舎衛国」の誤伝かと推考される。久遠寺本の「仏生国」の右肩に「舎エ国事也」と傍注が加えられている。四部合戦状本は②⑧⑨に略述改変の跡が著しく、「化影国」も「山傾国」と独自の改変を加えている。次も対句入れ替えの例である。

身延山久遠寺本『宝物集』

延慶本『平家物語』

③⑩ 戒賢論師ハ只人ニ非ス。玄辨ニ三蔵ノ師ナリ。

阿闍世王ハ凡夫ト云ヘカラス。靈山ノ聴衆ニツラナル。

(第二分一五〇頁)

戒賢論師ハ凡夫ナリト云トモ玄辨ニ三蔵ノ師也。

阿闍世王ハ直人ニアラス。靈山ノ聴衆也。

然トモ加縁ノ苦ヲハ遁レ給ハサリケルニヤ。

昔ノ普明王ハ班足王ニトラレテ(以下略)

(三一六三二頁)

③⑪ 昔、須陀摩王。妃后妻女ヲ具ンテ

苑ニ出ツ。(第五分一二四頁。抜書略之とあり。)

③⑫ は人間道八苦の第三、病苦を説く件に収められている重病の苦痛の事例である。延慶本では、その文末の編集句に明らかなように、その苦しみを地獄道に準えたといえる。①⑩の述部を互いに置き替え、かつ⑩の表現を改変した。③⑪は「須陀摩王」と「班足王」を主人公とする不妄語を説く説話である。延慶本は一方の主人公を「普明王」の名に替えて、内容の焦点も不妄語に当てるのではなく、悪王(班足王)にも情はあったという、つまり鬼の目にも涙の物

語を対照させることによって、平家一門が体験した地獄苦の悲痛さを際立たせている。

六道経歴の最後に残された畜生道の叙述は、次の八箇所を宝物集に依拠している。（宝物集は本文を掲げず、巻数と頁を身延山久遠寺本によって示しておく。）

③ 天竺ノ術婆迦ハ后ノ宮ニ契ヲナシテ墓ナキ夢地ヲ恨

④ 阿育大王ノ子俱那羅太子ハ繼母蓮花夫人ニ思フ被レ懸ウキ名ヲ流シ

⑤ 震旦ノ則天皇后ハ長文成ニ逢テ遊仙囀ヲ得給ヘリ

⑥ 文徳天皇ノ染殿ノ后ハ紺青鬼ニヲカサレ

⑦ 亭子院ノ女御京極御息所ハ時平ノ大臣ノ女也。日吉詣給ケルニ志賀寺聖人心ヲ奉レ懸今生之行業ヲ奉讓シカハ哀ヲ懸給テ御手ヲタヒ突ノ道ノ指南セヨトスサマセ給キ。

⑧ 在原業平ハ五条亘ノアハラ屋ニ月ヤアラスト打ナカメ

⑨ サレハ涅槃經ニハ 所有三千界 男子諸煩惱 合集為一人 女人為業障ト説給ヘリ。

⑩ 大論ニハ 不嫌貴賤 但欲是墮ト説レタリ。

（以上 三一六三三頁）

宝物集第五は不邪姪の戒めを説く。延慶本はここから集中的に七箇所を採択して女院の畜生道を構成したといえる。その配列は、天竺震旦の故事を三、本朝の故事を三、經文二となるが、④の次に宝物集に依拠せぬ奈良朝の故事を一つ、⑦の次に『源氏物語』と『狭衣物語』の話題を挿入している。⑧の染殿の後の故事は、物怪祓い説話の一つである。四部合戦本は、最後の⑩を取り入れなかった。女院の畜生道体験の構成には、編集著述者も手を焼いたといえる。その大半を宝物集に負つて不邪姪破戒の故事集成の形態で切り抜けたといえる。

第五分―一九頁

第五分―二〇頁

（五―二七三頁）

第五分―二〇頁

第二分―四八頁

第五分―一八頁

第五分―二二頁

第五分―一八頁

第五分―一九頁

かくて六道経歴語りを終える。残る話題は、その生涯の回想と述懐である。これに収まる依拠本文は八つである。上述の形式に従い紹介しておく。

④①サレハ釈尊入滅之時迦葉尊者一鉢ヲ捨テ叫ヒ給シ声三千世界ニ響キ橋梵波提ハ思ニ絶スミテ水トナリテ消ニキ。智恵勇猛ナル羅漢ソラ非滅還滅之理ヲ乍レ知当坐ニ別シニ不レ絶リキ。
(三一六三七頁)

④①流転三界中 恩愛不能断 棄恩入無為 真実報恩者

④②貧女カ一燈

④③昔右大臣ノ都ヲ出サセ給テ西海ニ趣キ給トテ都ノ跡ヲ思出テ

東風吹ハ句ヲコセヨ梅ノ花アルシナシトテ春ナワスレン

④④王照君カ王宮ヲ出テ胡国ニ趣テ十九年マテ歎ケムモ我身ニテコソ思知ラレ侍レ

④⑤七世之里ニ歸リケム人モカクヤ無_レ便侍ケム

④⑥弓削ノ以言カ伊ヨ国ヨリ歸リテ都ノイタク荒レニケルヲ見テ

青畝昔見猶花麗 白首今歸盡黍離

ト書タリケムモ理ト覺テ

④⑦唐帝之陽貴妃ヲ尋漢王ノ李夫人ノ形ヲ甘泉殿ニ写シ置ケムモ理ト覺テ侍キナム
(以上 三一六三九頁〜六四四頁)

宝物集の所載頁を括弧に入れてあるものは、身延山久遠寺本に抜書を欠くため、参考として吉田本を紹介している場合である。④①には対句の入れ替えがある。④①は宝物集では下二句を欠く。④⑥④⑦には傍線を附したように、延慶本の編集著述者に特有の編集語句が添えられている。四部合戦状本には、新たに実定卿との空観問答が構成されているため、これらの回想・述懐の部は構成を異にしている。従って④①④⑦は延慶本の形態では用いられていない。

帰洛後の女院記事と宝物集との依拠関係の対照・考察を以上で閉じる。その関係は、狭く「小原御幸」もしくは

「六道」の構成内に留まらず、出家に始まる女院往生伝の構成に及ぶ。しかも女院往生伝の構成に関わる宝物集依拠の編集方法は、これまた六卷十二冊形態の延慶本の編集著述の方法と深く関わっているといえる。特に故事・経文の内容を、女院の現実体験に照らして、その「理」を再確認する思惟と表現は、延慶本の編集著述者において見事に統一が保たれている。

四

まとめと展望

延慶本の成立過程については、二次・三次にわたる重層的成立説や、長門本等への増補説が一方に根強く立てられている。私はさきに著述部の編集句の全篇的な同質性を指摘し、場合によっては、現存の六卷十二冊形態の同次元成立説も考え得るという試論を立てた。本稿における宝物集依拠の本文の実態や編集の性質からもこのことがいえる。既に述べた事柄の繰り返しにもなるが、巻六本末に収められている女院往生伝の編集著述と全篇のそれとが成立の機を一にしているという特徴は重要である。恐らく、帰洛後の女院関係の物語は、現存諸本に関する限り、『平家物語』としては延慶本に遡源の姿を認め得るであろう。しかも、帰洛後の女院関係の物語は、若干の独立伝承譚を採択する他は、多く延慶本の編集著述者の著述部として成立している事実も認めねばなるまい。本稿では、この点に関し宝物集依拠の本文の側面からしか考察されていない。残された主なる課題の一つである。

依拠した宝物集の本文の性格については、身延山久遠寺本系の祖本に、恐らく第二種七卷本系の遡源のテキストもあったのではないかという推考をも含めて、その祖本との近似の可能性を、現存の身延山久遠寺本・最明寺本から考察した。久遠寺本の親本の発掘、新しい第二種七卷本の発見が期待される。尚、紙幅の都合で遡留大臣の記事（第一

末廿五「迦留大臣之事」等の、明らかに依拠していると判定されるいくつかの故事並びに成語の類については考察を省いた。また山陰中納言の説話（第三本二十「五条大納言邦綱卿死去事」）等の、他説話集との関連において判定する必要のあるものについては、『十訓抄』その他の本文批評を踏まえて、後日解明したいと思う。

第二種七巻本の成立年代の考証は、宝物集諸本の成立過程の中で、いくつかの立論が試みられているが、いま少し煮つまるのを待って、延慶本の成立年代の問題に突き合わせたい。ただ蛇足ながら、延慶本『平家』の依拠の実態から推して、第二種七巻本こそが、あるいは晩年の康頼が最終的完成本として残した『宝物集』ではなかったか、という臆説を加えておきたい。

最後に、宝物集依拠の著述部に添えられている編集句に「理」の語がしばしば用いられている事実がある。そしてこの事実は、宝物集依拠の著述部に限らず、延慶本の著述部全般に特徴的に現れている。編集著述者に特有の観念としての「理」が、延慶本の理念にまで昇華されているか否かは、今後より視界を広げて考察されねばならない。少なくともその編集著述者の、思惟の枠組みを決する一つの標識として「理」が選ばれているという意味では、安良岡康作氏によって投げかけられた中世的文学理念の問題に、延慶本という『平家物語』が、かなり真つ当な応答を志している事実は重要視されねばならない。とりわけこの事実は、安良岡氏の見解が、『平家』を「事」と「情」を表現することに集中して、理を「理」として確立し、展開させるまでに至らなかった作品なのではあるまいか。という問題提起に比重が傾いているという意味からも重要である。本稿は「理」の一端に触れるに過ぎず、かつ中世的文学理念の問題として、事実が掘り起こされているわけではない。残る課題としたい。

尚、宝物集諸本の翻刻・研究がなければ、小考も到底成し得なかった。諸先学の学恩を感謝したい。

註(1)

『戦記物語』の研究前篇第二初期の平曲を論じて灌頂巻研究に及ぶ。

(2) 諸本系統については小泉弘著『古鈔本宝物集』研究篇に依る。

(3) 『平家物語灌頂巻私考』成立に関する試論——(日本文学研究資料叢書『平家物語』所収)

(4) 『平家物語研究』第三章三の(4)「灌頂巻について」

(5) 『宝物集と平家物語——平康頼著作説をめぐって——』(説話二号)

(6) 「四部合戦状本平家物語灌頂巻「六道」の原拠考——宝物集との関係を中心に——」(愛知県立大学文学部論集「二十号」)

(7) 「宝物集初期諸本の展開相」(同前二十一号)「片カナ古活字版三卷本宝物集の諸本系統上の位置とその性格」(説林「十九号」)

(8) 註2 一七〇頁以下。

(9) 『平家物語の達成』一三四頁。

(10) 『平家物語の形成』一一七頁。

(11) 諸本の翻刻・紹介の成果に負うところ大である。感謝したい。

(12) 「伝承部と著述部——延慶本平家物語成立過程考——」(「国語と国文学」49年1月)

(13) 『山槐記』と延慶本との関係については別稿予定。

(14) 『妙本寺本曾我物語』巻第二(角川版三八頁)も身延山久遠寺本及び延慶本と同様に「古郷コウル」とつくる。

(15) 『平家物語「蘇武」の系譜稿』(「相模女子大学紀要」39年3月)

(16) 『妙本寺本曾我物語』同前「見ルカラニ鏡ノカケノツラキカナカ、ラサリセハ歎カサラマシ」

(17) 小泉弘氏の考勘では『千載集』撰進以前の成立説が最も古く、新しくて建長年間(一二五〇年代)を下らないとされる。延慶本の成立については仁治三年(一二四二)から建長四年(一二五二)が定説化されている。

(18) 註2 八四頁。

(19) 『身延山本宝物集と研究』二五〇頁。

(20) 一巻本・二巻本・三巻本はすべて第二句までの略述となっている。

註12の拙稿参照。

(21) 「中世文学史における軍記の系統をめぐって」〔文学〕49年5月

(22)